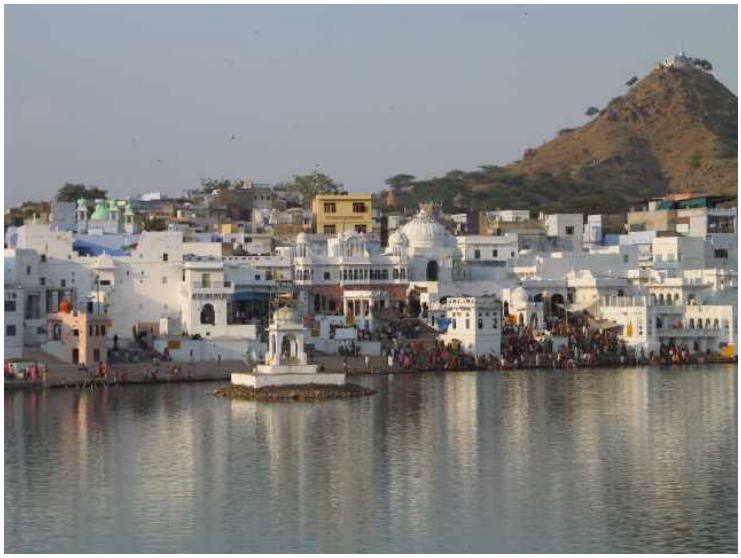
プシュカル巡礼

インドの首都ニューデリーから西南に四百キロほど行ったところにプシュカルという小さな街があります。印パ国境地帯に広がるタール沙漠の東端あたりに位置していて、背の低い草がまばらに生える半沙漠といった土地柄を想像してください。

いつもはけだるい時間が流れるだけのこの田舎町は、毎年ヒンドゥの暦で十一回目の満月を中心にした数日、実に数十万人の巡礼者が訪れるインド有数の聖地なのです。

この街の中心には小さな人工の湖がありますが、この湖は世界の根本的創造力をつかさどる神として崇拝されているブラフマ（梵天）が、天上から投げたはすの花が地上に落ちたところに生まれた聖なる湖と信じられています。



プシュカルは、はすの花という意味で、ブラフマが座る椅子とされています。プシュカル湖は、湖というよりちょっと大きめな池という感じで、ゆっくり歩いても三十分ぐらいで一周してしまいます。湖を取り囲む建物はすべて白壁で統一されていて、神聖な趣が漂います。

湖の周囲は小高い山に囲まれていますので、伏流水が湧き出してくるのか、街中の湖としては水が澄んでいてきれいです。奥のほうに三角に尖った山がありますが、山頂の白い建物は、サヴィトリというブラフマの妻を祀る寺院です。

湖は五百近くの寺院と五十二ヶ所の沐浴場（ガート）に取り囲まれています。特にブラフマを祀る寺院はインドでここしかないということで特別崇められているようです。

またこの湖での沐浴は生涯の穢

れや罪障を洗い流してくれる特別のパワーを持っているといわれています。生前に巡礼を果たせなかった人は、遺灰を湖に撒いてもらえれば極楽往生間違いなしということで、故人の追善供養のためにここを訪れる家族もいます。

とにかくインドでは、他の四大聖地すべての巡礼を済ませた後、最後に訪れるべきもっとも重要な整地であるとされていて、ここプシュカルへお参りしないと救われないといわれるほど大切な聖地なのです。

そんなありがたい聖地ならば、罪深い私もぜひ一度お参りをし、身を清め極楽往生を願わなければなりません。もちろん十一回目の満月の前後に行われるお祭りを狙って出掛けました。

人々は乗合バスや農耕用トラック、あるいは駱駝車に乗って続々と集まってきます。何十キロも歩いてくる人もたくさんいます。

もちろん聖地巡礼といっても、縁日の賑わいを求めて繰り出す人たちもたくさんいます。娯楽に乏しい沙漠の田舎であれば、年に一度のお祭りは何よりの楽しみでしょう。

小さな街ですから、宿泊施設も限られていて、私が泊まるのは仮設のテントです。ほとんどの人がお寺の宿坊のようなところに泊まったり、野宿したりです。寺院の中庭で、揃って朝食を摂っている所を見かけました。

街の中心のプシュカル湖に近づくにつれ雑踏は密度を増してきます。鮮やかな原色のサリーを身にまとった女たちの姿は強烈です。その上、頭、鼻、耳、唇、首、腕、足首といった身体のいたるところに装身具を付けています。

眉の間に付いている印はビンデ

ィと呼ばれています。もともと宗教的な意味合いがあり、既婚女性が付けていましたが、最近はおしゃれで付けているようで、いろんな形や色の印があります。

生涯の罪障を洗い流す聖地巡礼の旅ですから、色香に迷うことは慎まなければなりませんが、この地で出会った女性たちは間違いなく世界中で一番おしゃれといっても間違いありません。しかも目鼻立ちの整った美人ぞろいだと断言してもよいでしょう。

沐浴場（ガート）にはたくさんの沐浴する人がいます。私も身を清めようと階段を下りて行きました。するとサドゥー（聖者）らし

き男がすぐさままとわりついてきます。

「私は僧侶である。あなたのために祈ってやろう」

「きちんとした手順に則って沐浴を行わなければ罪は清められない」

「お布施をしなければここでの沐浴は許されない」

などとしつこく金を要求します。

いささか胡散臭い感じはしますが、お祭りだし太っ腹のところを見せて日本円で百円ほど渡すと、なにやら呪文を唱え、湖に向かって花びらを撒き、湖の水を私の体に振りかける儀式をやってくれました。百円で罪障消滅ならこんな安上がりの方法はありません。ありがたい限りです。

街外れでは駱駝、羊、牛、馬、山羊といった家畜が砂丘を埋め尽くしていました。この家畜市は世界最大の家畜市だといわれていますが、特に駱駝のセリ市では数万頭が取引されるそうです。

ためしに大きくて丈夫そうな駱駝の値段を聞いてみましたが、言い値は日本円で七万円ほどです。

適正な値段まで値切るのに、すくなくとも半日はかかることを覚悟しなければなりません。

モロッコへ行ったときに、マラケッシュという街でロバを買い、カスバ街道をロバにまたがって旅したことがあります。次の街で買

い手を探したら、ほぼ買った値段で売ることができました。世を捨て、駱駝に揺られ、タール沙漠を彷徨するのは夢ですが、今回は日本へ帰るつもりですので購入は見送りました。

多くの観客を集め、迫力満点の駱駝レースも開催されました。レース前に、今年出品された中で最も優れた家畜が表彰されます。

これが売買された家畜の中で、最も優れた家畜として表彰されることになった駱駝で、飾り付けを施され新しいオーナーに曳かれて場内を一周します。私も日本からの特別ゲストということで、先導役を勤めさせていただきました。

レースは真剣勝負、すごい迫力です。駱駝も本気で走ると相当な

スピードが出せます。

一日中歩き回って、疲れ果てて宿舎のテントに帰ってくると、ジプシーの一行がやってきました。インドは庶民芸能の宝庫といわれますが、砂の上に一枚の布を引けばそこが彼らの舞台です。その上で彼らは歌い踊ります。芸を披露しながら村々を回る大道芸人にとって、お祭りは一番の稼ぎ時です。

夕陽が沙漠の果てに静かに沈むと日中の熱気も次第に薄れ、砂丘のあちこちでは野宿する人たちの焚き火が輝きを増します。町の喧騒にもみくちゃにされた一日を振り返り、火照った体を癒すには冷たいビールに勝るものはありません。

しかし、ここは聖地です。肉食や飲酒は厳禁されています。とは言え、何事にも建前と本音、原則と例外があります。テント村の管理人の親父に交渉してみることにしました。

「冷たい飲み物はないかね」

「水ですか？」

「バブルが弾けるやつがいいね」

「コーラがありますぜ」

「ふむぅ、甘い飲み物は嫌いだ。月のように冷たく、さっぱりした飲み物はないかね」

「ないこともないですが、ちょっと値がはりやすぜ」

夜もふけたころ、テントの外でささやく声がします。

「旦那、月です。月を持ってきました」

空を見上げると中天に神々しい満月が冷たく輝いていました。。

fujizakura